

栃木県大田原市湯津上の金丸原開拓は、市の南部に位置し、近くには国宝「那須国造碑（なすのくにみやつこのひ）」や、「侍塚古墳」など、日本の歴史上重要な史跡が多く残されている。

この地は標高150m程で、夏は暑く雨が多い。冬は寒く乾燥し、気温がマイナスになることも多い。

45年11月に、金丸原陸軍演習地だった土地を中心に、100名を超す開拓者が入植し、鋤入れを行った。

開墾初年度はジャガイモや陸稲、サツマイモ等を栽培したが、期待通りの収穫は得られなかった。当初は家畜も少なく堆肥も無く、資金不足で土壌改良剤の購入もままならなかった。

この地は、那須火山灰の酸性土壌で、改良は困難だった。48年に金丸原開拓農協が設立され、酸性土壌改良事業などにより、徐々に改良されていく。

49年に開拓営農資金によって北海道から乳牛を導入し、酪農が始まった。入植以来、土壌問題、冷害、風水害等に悩まされ、畑作の不安定さを痛感した。飼料作物なら冷害等の影響も少ないことから、酪農が中核的営農形態となっていった。

70年代に入ると、養豚や肉用牛経営を取り入れる農家も出てきて、着実に広がっていった。

また、果樹栽培も本格化し、梨畑が広がってきた。

64年には当時県が推進していた養蚕が始まり、順調に伸びたが、㉙年以降は国際的な生糸の需給悪化により衰退した。

また、76年には開拓整備事業による飲雑用水施設が完成し、長年の水不足も解消された。

同年、農協事務所敷地内に、組合員により拓魂碑が建てられた。現在も、拓魂を受け継いだ後継者が頑張っている。

金丸原（かねまるはら） 09-210-2

①調査日 平成28年7月12日

②所在 大田原市湯津上町

③地区の沿革 復員軍人、地元から90戸が昭和20年11月に標高150米の風積火山灰土の軍用地跡に入植。陸稲等の畑作を行うも十分な収量がなく不安定。乳牛の導入で畑作酪農に転換した。

④設置年月日 昭和51年11月23日

⑤設置者 金丸原開拓農業協同組合組合員

⑥碑文（表面） 拓魂 栃木県知事 船田 譲 書

大東亜戦争の終結により國は祖国再建の国策として緊急開拓を実施す これに応じ昭和二十年十一月二十三日かつてはつわもの共の夢のあとであった金丸原陸軍演習場跡地に裸一貫の同志九十余名こゝを墳墓の地と定めて金丸原帰農組合を結成し鋤入れを行い越えて昭和二十三年九月法律の施行により金丸原開拓農業協同組合を設立 盟を新にして再生の大業に踏出す 此の地は那須野が原の一角清流那珂川のほとり遙かに那須の噴煙を仰ぎ見る広漠たる原野にして眺望豊かなれども慣れぬ手に貧しき農具を駆使しての開墾は言語に絶するものあり生きんがための道は険しくまた遠く住むに家なく喰うに食なく加うるに水道路など生活の基盤を整うるに日夜東奔西走一握の稔りに希望を託すれども無情白穂の浪に打拉しがれしこと幾歳ぞされど湧き出ずる斗魂は一步も退くを許さず辛酸苦斗三十星霜地元先輩諸氏の温情のもと弛まざる同志の団結と努力は行政と組織の手引きにより遂に初心を貫くことを得今や過ぎし日の原野は豊穰の沃土と化し家畜また明日の栄えを謳うかくして打ち樹てしこの一郷後人いつの日にかこれを想起せんこゝに永年に亘り援助鞭撻を賜りし方々に感謝の誠を捧げ拓墾の二字に子孫繁栄の祈を籠め開拓初代の名を刻してこの碑を建立す

昭和五十一年十一月二十三日

金丸原開拓農業協同組合組合員一同

⑦碑文（裏面）

金丸原開拓賛歌 移りゆく御代となるとも
國破裸身故山歸 忘れるな
同志互援三十霜 同志とふりし
悠就不動那須嶺 鋤の重さを
今成我郷金丸原

竹芳山人 作書

開拓初代 90名氏名 4名氏名

⑧現在の状況 金丸原公民館地内で管理されている。